

新九郎通信



発行 小田原市栄町 2-13-3 (株) 伊勢治書店 3F ギャラリー新九郎 木下泰徳
 メール配信サービスご希望の方は右記アドレスへお申込みを e-mail:kinoshita@iseji.net

新年明けましておめでとうございます。2011年うさぎ年。本年が皆さまにとって素晴らしい年になりますようお祈り申し上げます。お陰様でギャラリー新九郎は15年目の大きな節目を迎えることができました。

本年も様々なジャンルの作品展が年間を通して予定されています。






今年も新九郎は、皆さまとアートのすてきな出会いの場となるよう、そのお手伝いをさせていただきたいと心新たにしています。本年もギャラリー新九郎をどうぞよろしくお願ひします。



新九郎 1月の展覧会のご案内

近隣・友の会会員の展覧会情報



会期 展覧会名	見どころ	1/6(木)~10(月) 西ゆり会美術展	ツノダ画廊 0465-22-4250
 1/19(水)-24(月) 新九郎新春版画展	上村松園、堀文子、前田常作等の日本画。元永定正、鬚嘸、宮迫千鶴、横尾忠則等の現代アート作家の版画展です。3000円~10000円のお買い得コーナーもあります。 	1/8(土)~23(日) 第3回新春をひらく展	すどう美術館 0465-36-0740
	特別出品 山口薫「水・冬」油彩 F6 柳原義達「道標」ブロンズ	1/2(日)~31(月) 河原秀生展	はげ八鯨 0465-22-0945
	18:15~20:45 コスチューム、固定ポーズ 会費 1500円	1/13(木)~17(月) 2011 西相美術新春展	アオキ画廊 1・2 階 0465-22-0825
	今回は波紋の壺と赤と黒を主に彩色した食器たちです。	1/12(水)~2/7(月) 新春富岳展	お堀端画廊 0465-23-7819
		1/15(土)~25(火) 水・木休廊 住谷重光展—大磯の光と風—	ギャラリーさざれ石 0463-67-9662
		1/6(木)~20(木) 藤田昭子小品展。干支と泥人形	ぶらっすりー千元屋 0463-88-7117 秦野
		11/20(土)~1/23(日) 大正おだわら散歩・小暮次郎画	松永記念館別館 0465-22-3635
		1/15(土)~24(月) 創作ガラス。辻和美	うつわ菜の花 0465-24-7020

パリだより

横井山 泰



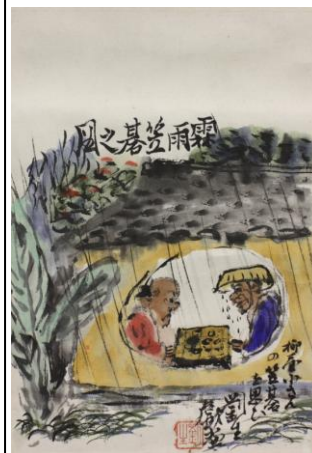
師走に入り、北極からの寒波がやってきた。本日(クリスマスイブ)の最高気温-3℃、最低気温-8度。関東では体験できない寒さである。ベルビルで毎週金、火曜に開かれるマルシェ(朝市)は)チャイナタウンという場所柄か、有名なバステューユのマルシェよりも値段が安い。ちょうどクリスマス前ということもあり、師走のアメ横のような賑わい。屋台とは別に、歩道に盗品のような衣類を並べただけの闇市もある。こちらは違法

なので見廻りの警官が来ると、荷物を纏めて逃げて行く。ギメ美術館にはアジア、中東美術(主に仏教美術)が収蔵されている。観ていて妙に落ち着くのは、やはり自分が日本人だからだろう。洋食ばかり食べていた所に、久々の和食といった感覚だ。「日本人の体には和食が合っている。」というのが近年常識になっているように、物の考え方や自然のとらえ方にも日本人に合ったものがあるのだろう。東南アジアの部屋に、妻曰く「そっくり」な石像。



ようこそ平塚美術館

平塚美術館学芸員 勝山 滋



岸田劉生 38歳、最晩年の作。雑誌「棋道」の原画です。デューラーばりの油彩作品と違い、後年に描いた水墨調の作品で、軽妙かつユーモラスな筆致によって長考する二人の様子を捉えています。「笠碁」は柳家小さん(五代目)で有名ですが、劉生の時代は先々代。素人棋

士の笠から落ちるのは雨か、はたまた汗のようでもあります。雨にぬれる屋根や林の表現も効果的です。鎌倉で再起をかけ、初期肉筆浮世絵にも傾倒した時期の特長がうかがわれる作品といえるでしょう。本作を含め所蔵品展は1月4日から開催しています。



人の人生は実に不思議なものだ。弁護士になる道を約束されていた人が、今、陶芸家としての道を歩んでいるのだから。多くの弁護士を輩出する最高学府で学びながら、陶芸家として独自の道を歩まれる野崎さん。その創作の源を知りたいとアトリエをお尋ねした。

大小3つの窯をもち、多いときは70人で制作することができるという広いアトリエは、湯河原にある「DO 工芸館」だ。自宅のアトリエが手狭になったことで、最近講師の仕事をしているこのアトリエが主な制作場所になっているのだという。素敵な作品が多数展示された棚は、生徒さんの作品と聞き驚いた。横浜、平塚、逗子、熱海と遠方より通う方も多く、皆長く習っているのだという。その信頼は野崎さんの指導力によるところが大きいのだろう。

野崎さんの作品と初めて出会ったのは 新九郎での奥様との二人展だ。固く焼きしめられた褐色に赤と緑の彩色が効いた湯のみは、手に取ると少しざらっとした石の感触が心地よかった。こげ茶とブルーのボーダー、茶の中にあしらわれた白の縞の美しさ、オレンジと紺のコントラスト。モダンな彩色と焼き締められただけの茶碗、酒器、鉢という日用品の一つ一つに凄い存在感を感じた。迷いに迷って求めた急須は、アジアのテイストの感じられるオブジェのようなフォルムながら 実用性が高く使い込むうちに愛着が生まれる作品だ。

トレードマークは見事な顎ひげ。その外見とは裏腹に、眼鏡の奥の瞳は、優しく温かい。いつお会いしてもにこやかに不思議な包容力を感じる方である一方、どこか「孤高の人」という印象がある。学生時代に遊びに行った沖縄で出会った「壺屋焼」が野崎さんの人生を変えた。東京の出身だがご両親の故郷は沖縄。柳宋悦、浜田庄司らも魅せられた「壺屋焼」に出会ったのは必然だったのだろう。飛び込んだ「壺屋焼」の世界は生粋の職人の世界。来る日も来る日も粘土を運んだり片づけたりの厳しい職人社会に希望を失い1年半の下働きの後そこで出会った先輩を頼ることになる。その人が今の奥様だった。奥様の故郷小田原に来て二人三脚、自分の道を求め続け、今の独特の作品が生まれたのだ。

独学で学び続けてきたという作品は、穏やかだがモダンさと懐かしさ、堅牢さも兼ね備えた野崎ワールドを作り出している。そこには、実用性と芸術性を融合させた「壺屋焼」の影響はもちろん、5年前まで行っていたシンガポールで出会ったマレー人の文化も影響しているに違いない。

シンガポールでは 中国系アートスクール経営者の依頼で「日本の焼き物」の指導に当たった。生徒の多くは日本の大企業、各国の銀行関係、国連関係者のご家族等セレブ達。英語の堪能な野崎さんは人気のある指導者として奔走した。織部やいびつな形の日本美が好まれたが「日本の焼き物」に欠かせない肝心な土が手に入らなかったことで、色々な工夫も試みたという。台湾の白い土、シンガポールの赤土、粘りの少ないきめ細かい土は低い温度でも焼き締まることなど土の特徴を学ぶ良いきっかけにもなった。インド、イスラム、中国と多人種の中、土着民族のマレー人の文化に沖縄と同じ匂いを感じたという。マレー人は、いわゆる底辺層の人種。学校にも満足に行くことのできない生活の中、彼らの生み出す絵画や彫刻に、優しさや温かさを感じ日本の文化の良さを再確認できたと振り返った。一方 野崎さんは優れたプロデューサーとしてのキャリアも持つ。熱海にある美術館兼アート&陶芸教室「プリント 21」の立ち上げや、最近「ライブの街」として売り出している小田原の先駆けともいえるミュージシャンを招いてのイベントを10年前から起こし、既にメジャーになり活躍しているアーティストも輩出した仕掛け人の顔を持つ。改めて野崎さんのキャパシティの広さを感じるエピソードだ。



作品に関して決して多くを語らない野崎さんが「遊びの要素をなくしたら良いものはできないからね」と本心を語ってくれた。学校を出た既成観念にとらわれない作品を作る姿勢は、指導者としても個性重視をモットーにしているという言葉からも伝わった。将来の夢はの問いに、「スペインで好きな焼き物を作りたいですね。」と笑った。遊び心と海が好きだという野崎さんには、明るいラテン系のスペインは実に似合う。そんな野崎作品を、新春1月26日から新九郎にて3回目となる個展で是非見ていただきたい。 木下和子

東京アートめぐり

アトライターの藤田千彩さんのガイドで東京アートめぐりを行いました。まずは三菱一号館美術館へ。この建物は英国人建築家ジョサイア・コンドルによって設計された、三菱が東京・丸の内内に建設した初めての洋風事務所建築。老朽化のために1968(昭和43)年に解体されましたが、40年あまりの時を経て、同じ地に甦りました。展覧会は「カンディンスキーと青騎士展」19世紀末にミュンヘンで活躍した芸術集団です。カンディンスキーを軸に、ミュンター、ヤウレンスキー、ヴェレフキン、マルク、マッケ、パウル・クレー等の絵が並びます。カンディンスキーの抽象画に入る前の絵がかなりあり、色彩の美しさ作品の強さが際立っていました。その後江戸川橋界隈を歩き、丹下健三設計の東京カテドラル、コンクリート打ちっぱなしの高く聳える円錐形の内部空間は荘厳でした。講談社野間記念館では村上豊展、細川家の永青文庫は茶道具と白隠の書画の展示、白隠の書に魅かれました。別館サロンでお茶をいただきながら細川護国公・護光親子の茶碗等を楽しみました。最後に寄ったギャラリー、ユカコンテンツポラリーでは展示の作家が参加された柏木さんのご子息(彫刻家)と知り合いで、思わぬ交流がありました。今回は14人の参加があり皆さんお楽しみいただけただけよかったです。第二弾は3月19日に表参道コース、根津美術館、岡本太郎記念館等を歩きます。



1年のこと

今年は根府川在住で90歳になる現役の画家、橋本樸々展で幕を明けました。一点の曇りもない澄みきった心、柔和なお顔と画一筋の生き方に感銘を受けました。この1年グループ展、個展等多くの方にご利用頂きましたが、30回、50回と続く伝統のあるグループも多く、改めて地域の方々に支えられてのギャラリーとの思いを深めます。展覧会の他にも様々な活動を行いました。イベント関係では4月に講談「二宮尊徳」7月「落語会」8月「ウクレレバンド」の演奏。映画会ではガイヤシンフォニー第4番、第5番、フランスのドキュメンタリー「未来の食卓」の上映。街なみ・ふる里再発見!展関係では、4月と5月にモチーフ探しの街あるき、6月には児童対象にお城でスケッチ会、11月に清閑亭スケッチ会を行いました。友の会会員の瀬戸克信さんによる西洋美術史セミナー「プラド美術館の魅力」も好評でした。毎月のデッサン会もアマチュアモデルの新鮮さが魅力となっています。

「小田原に美術館を」ということでこの1年毎月会合を重ねてきましたが、少しずつ動きが出てきました。三島の方より小田原市に井上三綱作品5点が寄贈されましたが、これは「おだわらミュージアムプロジェクト」の活動から生まれたものです。井上皓子氏と小田原市との友好関係構築への動き、収蔵庫の拡充整備の計画にも会の主張が影響を及ぼしていると思います。郷土ゆかりの作家展の企画も具体的な話になり、今年は実現に向け期待が持てます。この町に美術館を持つということは、ガスや水道と同じようにアートが私達の生活に欠かせないものと位置づけることです。子どもの教育から地域活性化までアートの持つ可能性は大きなものがあります。願いの実現に向け一歩ずつできることから進めていきたいと思えます。 ㊦